

財団だより

# 多摩川

1996. 3 第69号



ウシガエル(アカガエル科)  
川のよどみや池に住み、牛のよ  
うな声で鳴く。食用ガエルとも  
呼ばれる。



宿河原堰下の化石掘り。奥の円筒が工事中の堰本体（平成8年2月4日撮）

## ■多摩川現風景■

### (25) 多摩川で化石探検

堤防の上から眺めると、無数の人たちが水のな  
い川底にへばりついて蠢いているような何とも不  
思議な光景だった。2月4日、多摩川の宿河原堰  
の改築に伴いイベントとして行われた河床の化石  
掘りは、1500名を越える人たちが賑わった。宿河  
原堰は17世紀の初めに開削された稲毛・川崎二ヶ  
領用水の取水堰として使用されてきたが、老朽化  
や環境改善の目的もあり、平成6年から改築工事  
が行われてきた。今年から堰本体の工事着手で流  
れが一部堰止められたのを機会に、130万年程前  
には浅い海だった頃の地層、第三紀層の中の化石  
を掘ろうという催しである。二枚貝の化石をはじ  
め、イルカやアシカ、場合によってはクジラの化  
石も見られるということで、いわば宝物探しと  
いった雰囲気であった。いずれは、工事のため地  
ならしなどで掘削が始まるから、その前という

いきな計らいでもある。新たな堰は歩道が設置さ  
れたり、景観や生き物の生態にも配慮したもの  
となる予定である。

### ●関連する財団の研究助成

#### <学術研究>

- ① 都市化過程における水利システムの総合的研究  
1982年 玉城 哲 専修大学 (No.49)
  - ② 多摩川の水利開発史と水利調整に関する研究  
1982年 宮村 忠 関東学院大学 (No.52)
- #### <一般研究>
- ① 多摩川流域における地学的素材の教材化に関する  
基礎的研究  
1988年 伊藤久雄 目黒区立第八中学校 (No.55)
  - ② 多摩川中流域に分布する上総層群の古環境解析と  
それに基づく地質野外実習教材の開発  
1991年 松川正樹 西東京科学大学 (No.71)
  - ③ 多摩川中流域における地学の教材化の研究  
清水政義 都立桜町高校 (原稿作成中)

# 多摩川散歩

## ■水みちマップ■

水みち研究会 神谷博

湧水が地域の自然と文化を育んできたということは、近年広く認識されるようになってきました。市街化の進んだ東京では既に希少となった湧水ですが、いざその大切な湧水を保全しようと思っても、地下の中はどうなっているのか、よく分かっていませんでした。

地下は直接目にする事ができず、分かりにくい世界ですが、井戸を使っている人々は、何気なく使ってきた「水みち」という言葉の中にその様子をイメージしていました。わたしたちは、この経験に根ざした生活の知恵ともいべきイメージを地図にすることを試みました。

具体的には、井戸の調査を行い、使っている方や井戸掘り職人さんに地下水の様子等をヒアリングしました。調査は、1988年に小金井、国分寺、調布の3地区から始め、国立、府中、狛江、さらに三鷹、世田谷の各地で進められ、それぞれの水みちマップと小冊子を作成しました。これで野川流域全域と多摩川低地までの範囲がまとまり、

8地区をつなげた水みちマップも昨年出来上がりました。

調査してみると、井戸は思いのほか多く生きており、飲用にも使われていました。水みちはもともとあるだけでなく、井戸や、湧水、木、林などによっても形成されるものであること、そしてそれは細く壊れやすいものであることなどがわかりました。又、上下水道や建物の地下など構造物のまわりにも人工の水みちができることがわかりました。井戸はどこでも大切に使用されており、埋めるときにも丁寧に埋め戻した上でお清めをするなど、現代より自然とのつきあい方を心得ていたようです。

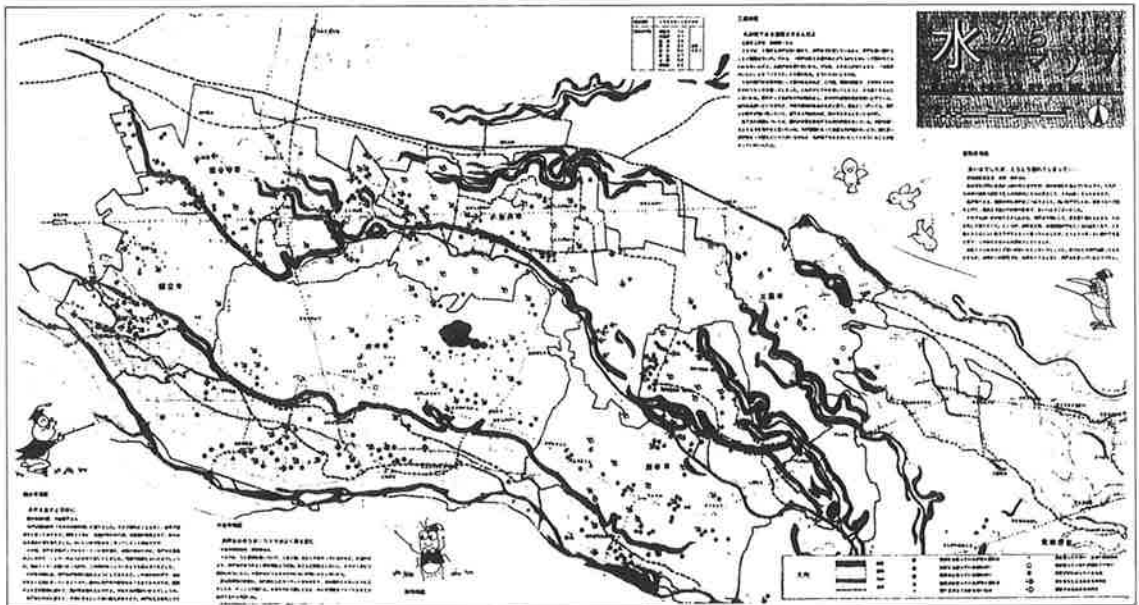
地下にも環境があり、文化があることはとかく忘れられがちであり、地下の開発ばかりが目につきます。湧水ひとつ守るにも、まだ何の手だても整っていません。市民でもできる調査をとおして、今後微力でも地下環境の保全に役立ちたいと思っています。

マップをご希望の方は、下記へご連絡下さい。

1部 500円

〒113東京都文京区千駄木1-22-30-404

水みち研究会 神谷博



## 私と多摩川

### ●「多摩川ジュニアガイドー多摩川へいこうー」 感想文

当財団では1995年度財団創立20周年を記念して、小学校高学年を対象とした環境学習副読本を発行し、多摩川流域の小学校の希望校127校に対し18千部を贈呈し、1996年度は増刷し同様120校に対し17千部贈呈致しました。

この度、世田谷区立松原小学校4年の生徒の皆さんから感想文を頂きました。多摩川に行かれた人の中から財団で選んだ3名の感想文をご紹介します。

#### 多摩川の勉強をした感想 田辺 幹人

ぼくは、みたくけいこくの校外学習はなかなかいい勉強になったと思います。水の流れは思っていたより速かったです。カヌーに乗っている人は、あんな速さでこわくないのかなと思いました。そこには鳥はいなかったけれど、魚はきついていると思います。だってつりをしている人もいたからです。ヘビやクモもいました。絵をかいている人もいました。

玉川上水の勉強は最初むずかしそうだと思っていました。でもなれてくるとー。およそ四百年前徳川家康が江戸に入ってきました。多摩川から四谷まで水をひいた庄右衛門と清右衛門は、すごいなと思いました。

多摩川は、昔、きれいな水だったと思います。その水がきれいだから玉川兄弟は、江戸の町に送って上水を作ったんだと思います。今の多摩川の水はよごれています。人間が川にゴミをすてたり、油や洗剤などを流したためです。川がよごれると、魚などが死んでしまったり、海がよごれたりします。でも、みんなで、川をきれいにするようにすれば、きっとまた、昔みたいなきれいな川にもどると思います。

#### 多摩川を勉強した感想 木下 香織

多摩川の勉強で一番おもしろかった事は、玉川兄弟が玉川上水を作った事です。

何回もしっばいしたのに、一生けんめいがんばって、とうとう、玉川上水を作ったなんて、本当にすごい事だと思います。

電車の駅の代田橋から、何か川のように水がたまっているところがあって「これはなんなのっ。」と私が聞いたら、お父さんが、「玉川上水だよ。」

と、教えてくれました。

私は、初めてその事を知ってとってもビックリしました。

本当にとっても深くてこんなにたくさんほったのかと、思いました。

「多摩川へいこう」の本で、野川というところにゲンジホタルがいるのをみて、ゲンジホタルをみてみたいなと思いました。

それと、お父さんといっしょにつりをしにいった時、とっても大きいコイが、五〜十ぴきぐらいたまっているのをみて、とってもびっくりしました。それに四十三キロメートル（全長）高低差九十メートルという工事を八月月でおわらせたなんて本当にすごいなと思いました。

水源林はきれいな花が咲いていたりしているのに、たいしがわら（大師河原）だとゴカイなんかが入っているのは少し残念な気がします。

#### 「多摩川へいこう」を読んで 藤田 航

##### ・水源林のことで

多摩川は、雨水が地下水となり、その地下水がわきでて、多摩川がたんじょうしたなんて初めて知りました。

ぼくは、最初「人間が流す所を作り、人間が水を流しているんじゃないかな。」と思っていましたが、多摩川は、人間が作ったのではなく、自然にたんじょうしたことが分かりました。

あと、「雨水は、草木のえい養になるだけ。」と書いていたけれど、地下水になり、川をたんじょうさせることもできると分かりました。

##### ・羽村と玉川上水のことで

ぼくは、羽村しゅ水せきを見学に行ったことがあります。

しょうえもん、せいえもんは、8か月で玉川上水を完せいさせるなんてすごいなと思いました。

##### ・二子玉川のことで

ぼくは、ここにびせい物をとりに行きました。

今から六百年以上昔、由良兵庫助という武士が戦で討死にし、その死体が流れついたことから、兵庫島という名前がついたといわれているなんて初めて知りました。

本書を希望の方は小学生に限り、住所・氏名・学校名・学年を明記し、240円切手を同封し申込み下さい。

# 甦れ！多摩川

## ■ 山田川を歩く ■

財団法人 環境浄化財団 山 道 省 三  
客員研究員

東京都河川部の管内図を見ていて聞き慣れない川の名が眼にとまった。「山田川」。わずか5km程の小さな川なのだが、八王子市の中心市街地の南側を流れ浅川に注ぐ。多摩地域のいろんな川を見てきたつもりだったが、初めて聞いたような気がするし、むろん行った覚えもなかった。最初は湯殿川を歩く予定だったが、どうも気になって山田川に変更した。地形図で見ると限りではどうせ街中の川だし例によって三面張の都市排水路になってしまっているのだろうと思っていたが、行って見るもので思惑とは違って、多摩の横山の川ともいえる原風景が各所に残されていた。

2月の中旬に積った雪が残る京王線めじろ台駅で降り地図を見ながら源流と思われる所に行くと、山田小学校に行きあたり、その校庭に湧水を集めたと思いき池があった。学校に聞こうと立ち寄りと思いがけず校長先生とお話することができた。その池は湧水の池ではなく井戸から供給している学校園だったのだが、事務室の中で昔のこの地域の古い写真や航空写真を見せていただいた。昭和40年頃のものだが低い丘に奥深い谷戸の風景があって、斜面に沿うように山田川が流れている。そして、八王子最古の名刹とされる広園寺とその塔頭が斜面に点在している。今はすっかり住宅地となっためじろ台の宅地はこの低い丘を削り谷戸を埋めて造成されたものである。

さて山田川であるが、山田小学校の校庭の端あたりから開渠となって地上に顔を出す。そして

うひとつ南側から支流が合わさって、広園寺の前の山田橋上で一本になり小さな蛇行を繰り返しながら流下する。この開渠になったあたりは、いわゆるコンクリート三面張で鉄分を含んだような赤茶けた水が流れている。流れは住宅地の中を昔の蛇行した流路のまま下るが、源頼朝が渡ったとされる月見橋の下は何と、マダケやモウソウチク、ケヤキといった雑木林に被われた素掘の川が残っている。このような斜面の雑木林に沿って昔のままの河道は現在改修中の市営墓地あたりを除くと国道16号線に架かる黄金橋の上まで約600mぐらい続き、山田川のかつての姿をとどめている。これには正直驚いてしまった。おそらく左岸側に張り出した民家があるため現状では改修不能ということだろう。東京都建設局は、平成7年7月に自然と共生する流域をめざして、と題し「多摩河川環境計画」を発表した。この中で、山田川はほぼ改修が終了した人工河道河川と位置づけ、自然環境を再生する河川に区分しているが、少なくともこの区間においては保全すべき状態にある。ただちに現況を調査して見直して欲しい。用地問題が片づけばすぐにもコンクリート護岸が延長されるような気配にあるからだ。黄金橋から下流は浅川合流点まで約2kmの間全くのコンクリート三面張としか表現しようがない。だからこそ、この未改修区間の風景は何とも残したいと思うのは勝手な考えだろうか。

ちなみに、今回山田小学校の岩崎校長先生からは貴重なお話しと資料をいただいた。その中に、川名の山田は「やまた」と地元では濁らないと教えていただいた。学校名もやまた小学校である。それにしても、京王線の駅名や東京都が川名とする「やまだ」の発音はどういう事だろうか？

案内図



## 財団からのお知らせ

## &lt; 研究助成報告書完成 &gt;

助成集報（23巻）並びに多摩川環境調査助成集（第16巻）が完成しました。

## 助成集報23巻

研 究 課 題	代表研究者	所 属
●地域構造の変容と水利システムの再編化に関する研究 -大丸用水、日野用水、府中用水を巡って-	田 畑 貞 寿	千葉大学園芸学部教授
●多摩川における河川敷利用の変遷について	三 井 嘉都夫	法政大学名誉教授
●多摩川水系の地表水と地下水の交流に関する研究	榎 根 勇	筑波大学地球科学系教授
●多摩川中・下流域における農業起源の硫黄含有有機化合物の濃度分布とその生物濃縮機構に関する研究	大 槻 晃	東京水産大学 海洋生産学科教授
●多摩川河川敷の固有植物群落構成種の生活史と存続に関する研究	井 上 健	信州大学 教養部助教授
●玉川上水の江戸市中における構造と機能に関する研究	神 吉 和 夫	神戸大学 工学部助手
●三頭山における集中豪雨被害の緊急調査と森林の成立条件の再検討	小 泉 武 栄	東京学芸大学 教育学部助教授

## 多摩川環境調査助成集第16巻

●多摩川の汚濁、支川の汚濁状況の藻類による判定の基礎研究	藤 田 晴 江	藻 類 研 究 所
●絵画にあらわれた河川景観の変遷 -多摩川を主として-	岡 村 直 樹	フ リ ー ラ イ タ ー
●多摩川上流水源山村地域における冷水資源と山葵栽培 -とくに日原川流域におけるもの-	上 野 福 男	駒 沢 大 学 名 誉 教 授
●多摩丘陵西部におけるタマノカンアオイの分布、生態と保護・育成に関する研究	小 泉 武 栄	東京学芸大学 教育学部助教授
●多摩川における組合漁業の歴史的考察 -村落構造と漁場利用関係-	宮 田 満	福生市教育委員会 社会教育文化財係長

## 寄贈文献の紹介

## ●「ひととはなぜ自然を求めるのか」

著者 山口昌男他 1995年 三田出版会  
本書は1994年11月に財余暇開発センター主催によるセミナーをまとめたもので、山口昌男（文化人類学）、河合雅雄（生態学・人類学）、松井孝典（比較惑屋学）、樋口敬二（地球科学）、中村桂子（生命誌）、中村雄二郎（哲学）各講師が各々の立場で人間と自然について論じている。

## ●「東京の森林-あるいて・みて・かんがえる-」

編著 財東京市町村自治調査会 1995年 公人社  
西多摩林間ゾーン（奥多摩町、檜原村、青梅市、日の出町、旧五日市町）は東京都の総面積の4分の1を占める。その森林の役割、産業、観光、歴史等さまざまな観点から地元の関係者の発言を随所に取り入れ考察し、森林の保護について提言をされている。

## 多摩川ルネサンスシンポジウムに参加して

このシンポジウムは、1984年から毎年行われ、今回は第12回である。現在、多摩川流域には70を超す大学が集中しており、日本における代表的な学園都市を形成している。

これらの大学を中心として多摩地域の科学技術の振興のための活動が毎年各大学を会場として行われている。今回の全体テーマは、「人間と自然の共生－21世紀の都市コミュニティづくり」である。11月18日、東京工業大学大岡山キャンパスで行われた。プログラムは、小林駿介会長の挨拶に始まり、開催校を代表して、塚田忠雄前工学部長の挨拶があった。基調講演は多摩大学の野田一夫名誉学長、生命誌研究館の中村桂子副館長により行われた。

野田氏は「責任ある市民づくりに大学が果たす役割」を講演し、大学とその所在する地域社会との隔絶を、社会的な制度面での欠陥として、鋭く指摘された。また、大学における学部の区分が、旧態依然とした矛盾をひきずっており非常に奇妙な状況となっている。これからの大学改革において、これらの問題点を一つ一つ解決していく必要があると述べられた。中村氏は「生命誌の扉をひらく」という演題で、生き物を一つの過程としてとらえ、進化の歴史の産物として考える生命誌の考え方を述べた。また研究者は、究めることと同様に、発表する能力、表現する技術を欠かすことができないことを指摘された。セッションB〔都市環境〕においては、テーマを「多摩川流域における環境保全と回復」とし、芳村の司会で、各パネリストの報告が行われた。星野義延氏（東京農工大学）の「多摩川流域の水辺植生とその分布」では、氏は、調査された多摩川の植物群落につい

て、地理的な群落の分布の特徴を解析し、分類した。その結果、群落の分布パターンは下流域、中流域、渓流域で明らかに異なっていることが分かった。また台地や低地にみられる中小河川の植生は多摩川の下流部と同じグループに属することが分かった。帰化植物の群落も多摩川の下流部に多く見られる。保全すべき水辺の植物群落は河川に特有な植物であり、多自然型河川工法、ビオトープの復元について十分な配慮が必要であるとの報告があった。

磯村康博氏（横浜市水道局 水質試験所）は「多摩川に再びメダカを」で絶滅したといわれている多摩川水系のメダカについて、メダカの生息し得る水域を求め、調査し、放流を試みることを考えた。繁殖用親メダカの入手、メダカの種苗生産、放流場所の選定と放流実施の段階を経て行われた。非常に熱のこもった報告で聴衆の感銘が会場にみなぎった。

土屋十罔氏（東京都 建設局河川部計画課）は「野川における水循環」で、用水と湧き水に支えられていた時代、都市化が進み用水が無くなり、地下水が減り、湧き水が減少し、かわって家庭排水が流れていた時代、そして、現在では下水道の普及で家庭排水も少なくなり、湧き水由来の自流量だけになった。昨年の夏は下流で500メートルにわたり川が干上がってしまい、コイ、ナマズなどを多摩川にうつすという事態が生じた。このような状況を時系列的に調査し、流域の変化流量、雨量の経年変化、水収支をまとめ報告を行った。最後に東京農工大学の福嶋司教授より親切丁寧に各報告について、またセッション全体についての評価のコメントがあった。 芳村重徳

- ・発行日 平成8年3月1日
- ・編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団  
〒150 渋谷区渋谷1-16-14  
(渋谷地下鉄ビル内)  
TEL (03)3400-9142  
FAX (03)3400-9141

＊印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1 TEL(048)831-8125

